



# コルドバ歳時記への旅 ⑦ 太田尚樹

9月

## 大地の収穫期

### 葡萄を収穫する

中世のスペインでは、一年のはじまりは九月であった。『コルドバ歳時記』（西暦九六二年編纂）にかぎらず、当時の暦を見ると、みな九月が年頭に来ている。スペインだけでなく、南仏でも丁稚の給与の清算、年貢の納入など、一年の経済活動の区切りと開始も九月だったのである。コルドバ歳時記では、「この月の間に、地方の財務官に、アカネ（染料）の徴集の手続きをするよう通達される」とあるのも、経済の年度初めの有り様が窺える。欧米の大学では、今でも九月に学年暦

がスタートするのも、その名残りだろう。そして耕地では農作業が最も多忙な時期になる。種蒔きが続いて、九月は収穫期を迎えるからだ。

コルドバ歳時記を基にした、イブン・アワムの『古農書』（十二世紀編纂）では、葡萄の摘み取りは九月の、気が鎮静化した新月、樽への仕込みは体液が活発化した満月の時期が最適であるとしている。しかし葡萄の作付面積が広大なスペイン、フランス、イタリアでは、摘み取り作業に時間がかかるので、新月だけに限定するのは難しい。

ワインの産地へ、葡萄の収穫作業を見に行ったこと

がある。さしもの燃え盛った太陽も肌にやさしく感じる九月に入ると、ラ・マンチャの葡萄畑では収穫を迎えていた。青くて固かったペドロ・ヒメネ種も、夏の燃えるような太陽の下で熟れて黄褐色に変わり、摘み取られるのを待っていた。

この時期、村人は夜が明けるのを待ちかねたように、家族総出で収穫作業に追われる。まだ朝露に濡れて蜜蜂が活動をはじめないうちに、できるだけ能率を上げておきたいからだ。いつもは野草を摘んだり、畑で雲雀の巣を探すのに忙しい子供たちも加勢する。大きな農園では、季節労働者やジプシーたちの稼ぎ時であ

る。摘み取り作業は、日が高くなるころには、大バケツ

にいくつも山になっていた。手作業に頼る摘み取り作業は時間がかかるので、工場の搾り作業に支障をきたさないように、運搬作業も迅速に進めなければならぬ。ワイン蔵の方からトラックが埃を巻き上げながらやってきて、摘み取り作業中の畑の前で止まった。次々と大バケツに入れられた葡萄が運び込まれると、トラックは元来た道を引き返し、摘み手はまた黙々と持ち場に散って行った。

フランスのボルドー、ブルゴーニュの葡萄農園で収穫がはじまるのは、スペインよりも少し遅れて九月中旬過ぎてからである。

五月号に登場した榊原崇弘君と私が九月中旬、ワイン街道の葡萄畑と酒蔵（シャトー）巡りをしたとき、現地では収穫期に入っていた。まず目を引いたのは、ボルドーの一級、二級ワインを醸造するシャトーの立派なことだった。本来はこの地方の荘園領主の別邸だったが、構えはまさしく中世の城館である。

葡萄畑の中で、朝日の中に光っているシャトー・マルゴーが見えてきたとき、榊原君が言った。「まるで



月暦図「9月」（葡萄の収穫）  
レオン サン・イシドロ聖堂壁画 12世紀

おわた・なおき●1941年東京生まれ。作家、東海大学名誉教授（比較文明論）。近年は昭和史ノンフィクションでも活躍する。最新刊は『駐日米国大使ジョセフ・グルーの昭和史』（PHP 研究所）。